

ポートフォリオシート利用についての覚書：授業形態との関連

松原 知子

1. 本稿の概要

異なる形態の複数の授業で、「授業記録」と呼ぶ記入用紙を使って学生に授業内容に関する課題の解答や、意見、質問などを記入させた。用紙の形式や記入させる内容を変化させながら検討した結果、e-learning 科目、講義科目、英語スキル科目に関して、有効に使える場合とあまり意味のない場合があり、それぞれの授業の特性に用紙の形式や記入内容を合わせる必要があると思われた。用紙の具体的な形式の検討を含めて考察する。

2. ポートフォリオと学生の自己管理能力

2.1 ポートフォリオ評価

教育におけるポートフォリオは評価の手段として語られることが多い。学習に関わる情報をまとめることにより、より「真正の評価」が可能になるというのがポートフォリオ評価法の主要な利点である。すなわち、個々の学習者のテストや実技の記録、作品や、本人および周囲の人々による意見に至るまで、多様な情報をまとめて保存し、これによって学習者をより多面的に評価したり、学習者本人と教員が共有して評価の可視化を図ったりできる。英語の授業では、学生をより的確に評価するために、定期試験に加えて頻繁な小テスト、プレゼンやスピーチなどのパフォーマンス、作文などのレポート提出などを課すことが多い。教員はこれらの成果を点数化して成績の評定に利用する。これは一種の簡略なポートフォリオ評価と言ってよいだろう。

一方、ポートフォリオを利用することは、学習者の学習に対する意識や意欲、教員の学習者理解や教授内容の改善などで利点が多いとも言われる。たとえばシャクリーら（2001）は児童を対象としてポートフォリオを用いた研究の結果、「教師、親、児童間のコミュニケーションが増加する」「児童の自己評価と目標設定に関するスキルが発達する」「反省的教育実践が発展する」などの「肯定的な進展」が指摘されているとしている。

2.2 学生の自己管理能力

学期末近くになって自分の出席回数を尋ねてくる学生がいるが、これは学生の自己管理が不十分であることの証拠である。最近では学生が自分の成績について教員に質問できるシステムを設けている大学もあるが、成績を受け取ってから成績評定の根拠について質問する学生は、授業に関わる自分自身の行動や、授業内容の理解度、試験での達成度などを把握できていない可能性が高い。英語のスキル科目（リーディングやリスニングなどの技能習得を目標とした科目）の場合、ふつう小テストは採点后に返却されるし、パフォーマンス・テストはクラス全員の前で行えば必然的に他の学生と比較可能なので、学生は自分がどのような評価を受けるか、かなり把握可能だと思われる。しかしながら返却された小テストは見直されず放置されることが多く、パフォーマンスについて自発的にメモやノートを取る学生は少ない。結果として自分の実績に関する資料を持っていないことになる。また期末試験の解答を見ると、授業で扱った教材の中で、教員が困難点として認識していなかった部分が実は理解できていなかったと判明することがある。学生は、自分が理解できていないことを意識していない、あるいは理解できていなくても質問しない場合が多いと思われる。

ジョン・M・ケラーによる ARCS 動機づけモデルでは、(1) 学習者の注意を引き (2) 自分に関連のあるやりがいを感じられ (3) 達成できそうだという自信が持て (4) やってよかったという満足感が感じられる場合に、学習意欲が高められるとされている（ケラー 2010、鈴木 2002）。これに基づいて考えると、学生の思考、行動、成果を継続的に記録し、学生自身がそれを定期的に確認して自分の成長や変化を把握することで、学習意欲を高く維持でき、より高い意識を持って授業に取り組むようになることが期待できる。

そこで、各学生の情報を一学期間継続して記録し、学生と教員が共有できるシステムとして、筆者が「授業記録」と名付けた用紙を使用することにした。作成にあたっては大阪大学大学教育実践センターが提唱する「ポートフォリオシート」を参考にした。この用紙の特徴は、各学生が自分専用の用紙を持ち、毎授業時に配付と回収を繰り返しながら同じ用紙を使い続けることによって、授業に関する記録を半期 15 回分一覧できるようになることである。なお他にも類似の記入用紙として「大福帳」「コミュニケーションカード」「シャトルカード」などと呼ばれているものが多数存在する。

以下に、授業形態ごとに、筆者の利用した「授業記録」用紙の形式と利用結果をまとめていく。

3. e-learning と「授業記録」

3.1 背景

e-learning の教材では、受講者（学生）の受講状況が自動的に記録され、受講者と管理者（教員）がその記録を共有し、学習の進捗度や評価を随時確認できる。これはウェブ教材の大きな利点である。しかしウェブ上の記録はウェブサイトにアクセスしない限り見ることができないため、インターネットを使う機会が限られていたり、ウェブサイトにアクセスすべきであること自体を忘れていたりする学習者の自己管理には役立たない。この数年、大学構内の物理的な掲示板を縮小または廃止する大学が増えており、そのため定期的に大学のウェブサイトを見る習慣のある学生は増えているようだ。しかし特定の学習用ウェブサイトを定期的に訪れる学生は、まだ少数と思われる。これは、スマートフォンでは利用できない、自分で自由に使えるコンピューターを所有していない、学習のためにインターネットを利用するという態度が不足している、などが理由として考えられる。したがって特に大学1、2年生に対しては、定期的に自然に目に入る物理的な媒体のほうが、スケジュール管理や学習意欲の維持のために効果があると思われる。

筆者が担当している英文法の科目（Grammar Practice および新年度開講の Active English Grammar）では、自動採点されるウェブ教材と、授業時間に配付する応用問題のハンドアウト（以下、配付課題）を用いた、一種のブレンデッド・ラーニングを行っている。一般のブレンデッド・ラーニングと異なるのは、対面の授業時間にも一斉授業は行わず、出席も取らないことである。配付課題は授業時間に配付するが、締め切りは2～3週間後に設定するので、その場で解答して提出しても、持ち帰って別の日に提出してもよい。提出された配付課題は教員が評価して授業時間に返却する。配付課題をまとめて受領、提出すれば、授業には数週間に一度出席するだけで済むので、学生にとっては e-learning に近い授業形態になる。しかしウェブ教材による完全な e-learning よりも課題に多様性を持たせることができ、また配付課題を受領・提出するために教室に来ることで、学習スケジュール管理や意欲の

維持がしやすいことが期待できる。

この科目では以前、ウェブ教材システムのみを用いた完全な e-learning を行っていた。その際、期末までにすべての教材を残さず受講できるように、教材の受講スケジュールのモデルを設定し、期日に遅れないように受講することを促した。この受講スケジュールは表にして、教材タイトルの脇に修了チェック欄を設けて印刷し、学生に配付した。しかしスケジュール通りに受講せず、期末にまとめて受講する学生が散見され、また少数だが、結局いくつかの教材を未受講のまま残してしまう学生もいた。ウェブ教材を利用する他の英語科目でも同様のスケジュール表を配付したが、このスケジュール表を脇に置いて受講している学生を見かけることは、ほとんどなかった。このような経験から、単にスケジュール表やチェック表を持たせるだけでは、学生は十分な自己管理ができないものと思われた。

現在の英文法科目の授業形態では、ウェブ教材の学習結果はウェブ上に記録され、各学生と教員が同じ結果を一覧することができるが、配付課題の提出・返却の有無や評価については、教員と学生は記録を共有できない。その結果、課題の提出を忘れて、同じ課題を2回提出したりすることがあったので、学生と教員が情報を共有できる何らかの連絡システムが必要と思われた。

3.2 用紙の形式

上述のような問題点の解決法として、2012年に「授業記録」の利用を始めた(図1)。大阪大学の「ポートフォリオシート」をもとに、学生情報記入欄を大幅に簡略化して作成した。A4版両面で、全15回分の記入欄がある。最左欄は授業回数と日付、「トピック」は学習した文法項目または受講した問題タイトルを、「内容／質問」欄には学習内容のまとめや質問を、「ABC」には自分の理解度についての自己評価を記入するようになっている。右端の「教員記入欄」には、配付課題の提出と出席の記録をとることにした。

3.3 使用法

最初の授業で受講スケジュール表などと一緒に「授業記録」用紙を配付し、記入方法を簡単に説明した。記入方法は詳細に規定せず、自己管理のために記入するように促した。履修者は文学部の37名で、期末までにすべての所

2012 年度 授業記録		学科 専攻	フリガナ	
学部		学籍番号	名前	
曜 限	科目名:		教員名	松原 知子

	トピック	内容／質問	ABC	教員 記入欄	
1					
月 日					
2					
月 日					

図 1：2012 年度「授業記録」用紙（英文法 e-learning 科目用）

定のウェブ教材を受講し、配付課題を所定の回数提出し、期末試験を受験して単位を取得したのは 33 名であった。最終成績は、期末試験の得点に、配付課題に対する評価とウェブ教材の受講状況を加味して決定した。

3.4 結果

学生の記入内容と記入量はさまざまであった。大半は日付と問題タイトルだけであったが、中でも時々質問や感想を書く者がいた。一方で毎回記入欄いっぱいに関心や「間違えたところを見直したい」「自学自習をどんどんやって英文法をマスターしたい」などの意欲を表す者もいた。記入量、記入内容と成績には特に関連は見られなかった。最終成績が 80 点以上の 10 名には、問題タイトルさえもほとんど記入しなかった者が含まれていた。一方、不合格となった 4 名中 2 名は、授業時間にほぼ毎回教室に来て「授業記録」コメントを書いていた。自己管理のできる学生は「授業記録」を必要としないということが想像できるが、毎回出席してコメントを残しながら不合格になった学生は、「授業記録」の役割について誤解していた可能性もある。

教員の立場での「授業記録」は、記入内容の点検に時間がかかるのが難点であった。「授業記録」の配付課題についての学生による記述と、実際の提出状況を照合する必要があったが、当初、配付課題の用紙は「授業記録」とは別に提出されていたので、2 種類の用紙を整理するのに手間取った。そこで学生数だけクリアファイルケースを用意し、学生には「授業記録」と配付課題を同じケースに入れて提出するように指示した。これで照合は楽になっ

たが、ケースからの用紙の出し入れが面倒であった。

この「授業記録」によって配付課題の提出状況は確実に記録され、同じ課題を2回提出するなどの間違いは無くなった。しかし「授業記録」用紙を通した学生への働きかけは十分には行えなかった。前述のように、教員は、ウェブ教材、配付課題の両方について記載内容と実態を照合する作業と、配付課題の採点評価という作業を行わねばならない。そのため「授業記録」にコメントを記入する時間的余裕がほとんどなかった。実際のところ、学生が記入したのは主に学生の学習内容であるため、問題なく学習を進めている学生に対してはコメントする必要はないと思われた。ところが、一見、何の問題もないように思われて、実はウェブ教材をまったく受講していなかったり、配付課題を学期の途中からまったく提出しなくなったりする学生がいた。「授業記録」用紙の記入方法を細かく決めなかったため、ほとんどの学生は自分が既に学習した内容だけを記載していた。その結果、詳細な照合を頻繁に行わないと、ウェブ教材の学習不足（見落とし、やり残し）に気づきにくかった。ウェブ教材のように1つ1つをこなしていくというタイプの学習については、むしろチェックだけで済む一覧表のほうが適していると思われた。

「授業記録」にコメントを書く時間がとれなかったのは、学生の意欲に関わると思われ、望ましい状況ではない（向後2006）。しかし学生からの文法上の質問に時間をかけて回答したり、問題が見つければ、授業時間中に話し合う時間をとったりするなどの策を講じることができたのは利点であった。

「授業記録」用紙利用は学習意欲の維持に役立つとも思われたが、この科目のドロップアウト率や成績との相関は確認できていない。「授業記録」導入後、2012年度前期の不合格率（履修登録したが単位取得できなかった学生の割合）は10.8%、後期は28.6%、2013年前期は13.6%であった。「授業記録」導入前の2011年度は前後期総合で20.9%、2010年は26.2%だったので、導入後は比較的不合格率が低いようにも思われるが、ちょうど授業の形態を変えた時期でもあり、学生数も限られているので、この数字だけで相関の有無を論じることはできない。

なお学生が「授業記録」用紙を持ち帰ったために混乱を生じたことがあった。学習の記録が集中して記載されているだけに、用紙を確実に配付・回収することには、ことさら注意を払わねばならない。

ウェブ教材と配付課題を用いた授業での「授業記録」用紙の使用結果を表 1 にまとめる。

表 1：ウェブ教材・配付課題による授業での「授業記録」

目的と使用法	
<p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の進捗状況を記録する ・学生と教員相互による問題点の提示と回答 <p>【使用法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的に学習内容を記入 	
教員・学生 共通の利点・問題点	
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出席や学習の状況を個人別に確認できる。 ・学生と教員が学習状況に関する資料を共有できる。 ・教員と学生の個人的な意思疎通が図れる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業時の用紙の配付・回収（受領・提出）が面倒。 ・紛失すると影響が大きい。用紙の受領と提出を確実にを行う必要がある。 ・[ウェブ教材] ウェブ上で自動的に記録され、学生と教員双方が閲覧可能なので、意義が感じられない。 ・これまでのところ、修了率や成績に正の効果は見られない。 	
学生の利点・問題点	教員の利点・問題点
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・達成感が味わえる。 ・質問や意見を言いやすい。 ・個人的なアドバイスや、質問に対する解答が得やすい。 ・[ウェブ教材] 学習サイトにアクセスしなくても進捗状況がわかり、ウェブサイトにアクセスしようという意欲につながる。 ・[配付課題] 間違いなく受領、提出することが容易になる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入が面倒。 	<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ウェブ上の記録よりも対面指導に利用しやすい ・知りたい項目だけを自由に設定して記録できる。 ・基本的に学生が記入し、転記の必要がない。 ・学生の質問や相談に対して、時間をかけて解答できる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題の進捗状況を一覧できない。 ・学生全員を一覧できないので、全体の傾向をつかみにくい。 ・用紙の保管、配付、回収が面倒。 ・学生が記入した内容の確認と、教員のコメント記入に時間がかかる。

4. 講義科目と「授業記録」

4.1 背景と使用法

これまでに利用報告のある「ポートフォリオシート」「大福帳」などの記入用紙は、主に講義科目に利用されてきた。講義中心の授業はややもすれば教員の一方向的な講義に対して学生が受動的に聞くのみになりがちであるため、学生が授業内容について記述することが、授業の活性化に役立つと考えられている。

筆者が担当する「英語科指導法」の授業は、学生が中学・高校の授業展開を考え指導案を書き模擬授業をするという演習が主な内容であるが、学習指導要領や授業展開モデル、指導技術などについての基本的な知識を、教員が口頭で説明することがある。実際に授業を行ったことない学生にとって、これらは現実味のない内容であり、退屈を感じる学生もいるようだ。しかし学生は説明された内容を自分が考える授業に当てはめ応用しなければいけない。この思考作業を学生が確実にに行い、それを教員が確認するためには、学生本人が、それを目に見える形で表現する必要がある。そこで授業のまとめとして、教員による説明の要旨や、応用したいアイデアなどを、学生に文章で書かせることにした。

指導案作成演習の過程においては、学生がアイデアに詰まったり、そもそもどのように考えれば良いかがわからなかったりすることがある。そのような場合は教員からアドバイスをする必要があるが、授業中に学生の書いた指導案を検討し具体的な提案をするのは、時間的に難しく、またその場で適切なアドバイスができるとは限らない。週をまたいで学生と教員が問題点を共有し検討する場として「授業記録」を使えろと考えた。

学生による模擬授業を行った後は話し合いの時間を取るが、十分な時間を確保することは難しいので、学生には模擬授業に関するコメントを書かせている。参加学生の意見を授業者本人に伝えたいが、教員がコメントの内容を確認しようと思うと、授業者がコメント内容を検討する時間が十分とれないことや、フィードバックが遅くなることが考えられる。また授業者本人へのコメントは、励ましなども含むため、コメント者の授業分析力や批判的な意見を必ずしも反映しない。そこで学生には、授業者へ直接渡すコメントとは別に、総括としての意見を「授業記録」に書かせることにする。学生は模擬

授業に関する賞賛、批判、疑問などを総合して書くことによって、授業のあり方を考え直す機会が得られる。また教員は、学生の分析力や疑問点を知ることができる。教員は授業後に「授業記録」を読み、疑問への回答を記入したり、次回の授業内容に反映させたりすることができる。筆者の場合はブログを利用して、教員の講評や参加学生の代表的な意見や質問を掲載したり、まとめて印刷したものを次の授業時に配付したりする。これによって授業時間の不足をかなり補えると思われる。

4.2 用紙の形式

英語科指導法の授業で使用する「授業記録」は比較的長い文章を書くことが多い。図1の形式では記入欄が小さすぎるため、記入欄の行を増やし、トピック・内容／質問・ABC評価の欄を結合してすべて自由記述欄とした。記入欄の行を増やしたことで、A4版では収まらなくなり、A3版を半分に折ってA4版の大きさに扱うことにした。(図2)

2013年度 授業記録		学科 専攻	フリガナ	
学部		学籍 番号	名前	
曜 限	科目名:		教員名	松原 知子

解答／質問			教員 記入欄	
1				
	月			
	日			
2				
	月			
	日			

図2：2013年度「授業記録」用紙（「英語科指導法」用）

4.3 結果

学生による授業のまとめや質問、コメントを記述する目的で、この用紙は大いに機能している。選択授業であり、意識の高い学生が多いためか、毎回長文の意見が書かれている。一方で、通り一遍な感想だけを記入する学生もいた。学生が何を考え何を書けば良いか迷わないように、必須の記入項目を1～2点決めておき、意見や質問は任意で記入するよう指示すれば問題はない。また授業を始める際に、その授業の最後に「授業記録」にどのような事柄を書くことになるかを予告しておくのも、効果があるようだ。

「ポートフォリオシート」「大福帳」などはいずれも授業最後の5～10分で記入することになっているが、長文を書くためには5分では足りないことが多い。しかし授業を10分以上早く切り上げるのは難しい。簡単に記入できる事柄を指定すれば短時間に記入させることができるが、毎回それでは「授業記録」の機能を活かしきれない。授業中の模擬授業やディスカッションなどの活動と同様に、「授業記録」記入も授業に必須の活動として時間配分を調整しなくてはならない。「授業記録」を単なる「まとめ」の活動としてではなく、その授業と次の授業とを結ぶ鍵となる活動と位置付けて、記入させる内容・項目をきちんと設定する必要があると思われる。

教員からのコメントや回答は上記の形式の用紙では書ききれないため、次の授業中に口頭で回答することが多かったが、すべての質問に答える時間がない場合も多い。また質問者にとっては、質問と同じ用紙上で回答を見ることができるようが好ましいので、さらに教師の記入欄を広げる必要があると思われた。

なお用紙を半分折りにすることで、思いがけない利点が生じた。欠席した学生の用紙に、配付したハンドアウトを挟んでおくことで、配付物を確実に学生に渡すことができるようになった。大人数の授業ではこのような手間はかけられないだろうが、30人程度のクラスであれば、以前に欠席した学生もハンドアウトを持っているという前提で授業ができるように、少しの手間をかける価値はあるのではないだろうか。

講義と演習の組み合わせである「英語科指導法」での「授業記録」用紙の使用結果を表2にまとめる。

表2：講義・演習科目「英語科指導法」での「授業記録」

目的と使用法	
<p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業内容の整理 ・授業時間の不足の補足 ・学生と教員相互による問題点の提示と回答 <p>【使用法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業最後に記入 	
教員・学生 共通の利点・問題点	
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業時間内に終わられない指導や意見交換を、紙面で補える。 ・欠席時の配付物を同時に配付（受領）できる。 ・出席や学習の状況を個人別に確認できる。 ・学生と教員が学習状況に関する資料を共有できる。 ・教員と学生の個人的な意思疎通が図れる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長文を書くには時間がかかる。 ・授業時の用紙の配付・回収（受領・提出）が面倒。 ・紛失すると影響が大きい。用紙の受領と提出を確実にを行う必要がある。 ・これまでのところ、修了率や成績に正の効果は見られない。 	
学生	教員
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問や意見を言いやすい。 ・個人的なアドバイスや、質問に対する解答が得やすい；教員からの回答をその後の学習に活かしやすい。 ・授業内容について考え直す機会が得られる。 ・授業の最後に書くことを意識すると、より高い意識で授業を受けることができる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入が面倒。 ・質問やテーマが指定されないと、何を書いて良いかわからないことがある。 	<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知りたい項目だけを自由に設定して記録できる。 ・基本的に学生が記入し、転記の必要もない。 ・学生の質問や相談に対して、時間をかけて解答できる。 ・学生の個別の問題点に答えやすい。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作業の進捗状況を一覧できない。 ・学生全員を一覧できないので、全体の傾向をつかみにくい。 ・用紙の保管、配付、回収が面倒。 ・学生が記入した内容の確認と、教員のコメント記入に時間がかかる。

5. 英語スキル科目と「授業記録」

5.1 背景と用紙形式

英語のスキル上達を目標とする授業では、ほぼ毎回、通常の活動として教師と学生間の Q & A（教員が質問して学生に解答させる活動）を行う。小テストはその Q & A をテストとして行うものであるが、シラバスで最終成績評価の数十パーセントに相当するとされていることも多く、学生にとっては重要な活動である。しかしながら採点后に返却された小テストをまとめて保管する学生は少数で、授業後の教室には、しばしば採点後の小テスト用紙が落ちている。小テストの結果を継続的に見ていくことは、自分の最終成績を予測し、対策をとる手段になるのだから、学生が過去の小テストの成績を一覧できれば、小テストの結果をより意識し、授業や予習・復習へより積極的に取り組むようになるのではないか。

小テストの結果を一覧できるようにするためには、毎回のテスト用紙をまとめておく必要がある。バインダーなどに綴じておくこともできるが、バインダーを用意し毎回テスト用紙を綴じる作業は学生に任せることになる。より確実にテスト用紙をまとめるには、テスト用紙を始めから綴じておくか、または同じ用紙に解答を記入させればよい。この目的で「授業記録」用紙を使うことができる。紙面に余裕があれば、意見や質問を受け付けるなどの目的でも同時に利用することが可能なので、複数の用紙を配付・回収する手間が省ける。

5.2 使用法

筆者が担当する総合的な英語の授業「英語Ⅱ」では 2012 年度前期から英文法の授業と同じ用紙（図 1）を使用し、小テストとして授業内容に関するクイズの答えや自己採点の結果（得点）、言語的なまとめとして授業の要点としてのキーワードやキーセンテンスを記入させた。リーディング中心の授業「アドバンスト・リーディング」では 2012 年度後期から「英語科指導法」と同様の「授業記録」用紙（図 2）を使用し、授業で扱った物語の内容についての感想などを記入させた。また一部の英語科指導法の授業では、教室英語や学校文法についての知識を確認するため毎回授業の始めに小テストを行っていたので、スキル科目と同様に、その答えを記入させたり、別紙で解

答して自己採点させた結果を記入させたりした。

これらの授業では、「授業記録」の記入は授業の途中でも行い、授業のまとめとしての役割とは限らず、授業中の活動内容の記録用紙という性格が強くなる。

小テスト用紙として、言語的なまとめとして、リーディングのまとめとして、それぞれの使い方の結果を以下に記す。

5.3 結果

5.3.1 小テスト用紙として

小テストの問題をあらかじめ「授業記録」用紙に印刷しておくことはできないので、問題は別の用紙に印刷して解答だけを書かせたり、別紙に解答させ、本人または学生同士で交換させて採点したあと、得点だけを記入させたりした。学生は明らかに得点の変化を意識しているようであった。任意のコメントにも、テスト結果についての感想がしばしば見られた。

筆者の授業では小テストの得点は最終成績の30%程度に設定している場合が多いが、日ごろの地道な努力を促すという意味合いが強いので、実施や採点は厳密に行わなくても構わないと考えた。そこで自己採点した結果の得点だけを記入させることが多かった。しかし解答そのものを記入させたり、別紙の解答用紙を提出させたりした場合に、正確に採点できていないことが多いことがわかったので、学生の採点中に注意して机間指導したり、問題内容によって解答も提出させるようにした。

「授業記録」用紙に小テストの解答や得点を記入させる意義は、それを継続的に目にすることができるということにある。小テストの内容はできるだけ毎回同じ形式、同じ難易度にして、努力した学生が成長を実感できることが望ましいが、そうでない場合でも、正答率が一目でわかるように記入させると良いと思われる。また任意で質問や感想を書かせることも、この用紙を活用する上で重要である。

5.3.2 言語的なまとめとして

総合的な英語のクラスでは、授業の最後に学生各自の「自分にとってのキーワード・キーセンテンス」を書かせた。学生の中には、「授業記録」記入前に既に自分のキーセンテンスがほぼ決まっている学生がいた。つまり授業中にキーセンテンスを意識していたということである。一方、授業の最後になっ

て、どの文を書こうか迷って教科書やノートを見直す学生も見られた。短時間に書ける学生の方が、教師の目から見て重要な文構造の文をキーセンテンスに選んでいるように思われた。

毎回同じ課題・テーマで書かせることで、学生の授業中の意識が高まることが期待できたと同時に、意識の低い学生には、授業内容の振り返りの機会を与えることができた。後者へはさらに意識を高める働きかけをする必要があると思われる。

5.3.3 リーディングのまとめとして

リーディングの授業では短編の注釈付きアンソロジーを教材としている。「授業記録」には、物語のあらすじや登場人物についてのクイズのほか、登場人物についての印象や、物語の今後の展開を想像させるなど、決まった正解のない出題をすることがある。この場合の答えには特に大きな個人差が見られた。

理想的にはこのような意見発表は授業中のディスカッションのテーマにしたいところだが、授業中に学生に意見を求めてもすぐに意見が出なかったり、発言を躊躇したりする学生が多いのが現実である。意見を言わせるのではなく書かせることで、他人の目を意識することなく独創的な発言もできる。またある程度時間をかけることで、自分の解釈を考え直し整理してから答えることができる。10分程度では記入できない場合は、質問内容を細かく分けたり、本文の参照箇所を示したり、選択肢を与えるなどして、短時間でも解答できるように調整した。

正解のない質問に対する解答の書き方からは、学生の言語的な知識や学習態度、授業に対する熱意など、さまざまなことが感じ取れた。授業中に扱った事柄を把握できたか否かはもちろん、個々の語彙の解釈など細かい点についての誤解が明らかになることも多いし、教科書の注釈を参照しているかどうかとも明らかになった。特に、その物語を自力で読んだか否か、物語を現実や自分の経験に引き寄せて解釈しようとしているかどうか、というような、授業中の口頭でのQ & Aではわかりにくい学生の状態が推察できた。通常の授業中活動として行いにくい側面を問う質問によって、授業内容をより多角的にすることができると思われる。また記入時に教科書やノートなどを見直す必要がある学生は、授業中の注意が不十分だった可能性がある。「授業記録」記入という活動が学生間の理解の差を縮める効果があることも期待できるだ

ろう。

考えを整理して書くには時間がかかるので、英語科指導法での「授業記録」利用の場合と同様に、「授業記録」記入も授業に必須の活動として時間配分を調整しなくてはならない。筆者の場合、授業が予定どおり進まず、記入時間を十分取れなくなることが多かった。そのためあらかじめ決めておいた質問ができなくて、その場で短時間に解答できる質問をすることも多くなってしまった。また授業の進度が想定と違ったために、決めておいた質問ができなくなることもあった。指導の計画を慎重に、余裕を持って立てておく必要があることを痛感している。

物語を教材とする場合、「授業記録」を次の授業と結びつけて考え、教員は「授業記録」にコメントを書くだけでなく、学生の記述を次の授業時に復習として利用できる。誤解を正したりさまざまな意見を紹介したりすることで、その後の授業への取り組み方の指針としても利用できるだろう。

なおリーディングのまとめとしての記述は、文章が長くなることが多いので、記入欄をさらに広げる必要があると思われた。

英語スキル科目での「授業記録」用紙の使用結果を表3にまとめる。

6. 全体の考察

以上のように、「授業記録」に書かせるべき事柄と、それに合わせた形式が、授業形態によって異なることがわかった。大切なのは、「授業記録」用紙へ学生に記入させる目的をはっきりさせ、目的と書かせるべき事柄と記入用紙の形式に整合性があることである。「授業記録」を導入したきっかけは、学生本人が出席や学習の状況を一目で確認できるようにするということであった。この目的では、どのような形態の授業でも、それなりの機能を果たすことが確認できた。

6.1 e-learning と小テスト

授業に出席することそのものが重要ではない e-learning 科目などでは、「授業記録」用紙に出欠を記録しておくことに意味はない。また e-learning 科目でのウェブ教材や一斉授業の小テストで、結果を一覧して進捗状況や成績の

表 3：英語スキル科目での「授業記録」

目的と使用法	
<p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小テスト結果の継続的記録 ・授業内容の補足 ・学生と教員相互による問題点の提示と回答 <p>【使用法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中および最後に記入 	
教員・学生 共通の利点・問題点	
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・[小テスト] 一目で結果と変化がわかる。 ・[リーディング] 授業時間内に終わられない指導や意見交換を、紙面で補える。 ・学生間の差を縮める機会になる。 ・欠席時の配付物を同時に配付（受領）できる。 ・出席や学習の状況を個人別に確認できる。 ・学生と教員が学習状況に関する資料を共有できる。 ・教員と学生の個人的な意思疎通が図れる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長文を書くには時間がかかる。 ・授業時の用紙の配付・回収（受領・提出）が面倒。 ・紛失すると影響が大きい。用紙の受領と提出を確実に行う必要がある。 ・記入欄が広くなり用紙が大きくなると、記入内容を一覽しづらくなる。 ・これまでのところ、修了率や成績に正の効果は見られない。 	
学生	教員
<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・質問や意見を言いやすい。 ・授業の要点を考える機会になる。 ・個人的なアドバイスや、質問に対する解答が得やすい。 ・授業内容について考え直す機会が得られる。 ・授業の最後に書くことを意識すると、より高い意識で授業を受けることができる。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記入が面倒。 ・[リーディング] 設問によっては、何を書いて良いかわからないことや非常に時間がかかる場合がある。 	<p>【利点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・知りたい項目だけを自由に設定して記録できる。 ・基本的に学生が記入し、転記の必要もない。 ・学生が授業の要点を理解しているか確認できる。 ・学生の質問や相談に対して、時間をかけて解答できる。 ・学生の個別の問題点に答えやすい。 <p>【問題点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生全員を一覽できないので、全体の傾向をつかみにくい。 ・用紙の保管、配付、回収が面倒。 ・学生が記入した内容の確認と、教員のコメント記入に時間がかかる。

変化を確認できることが重要である場合は、記述式の「授業記録」よりも、修了や点数を記入するだけの一覧表のほうが、目的にかなっている。

ただし学生と教員間の意思疎通を図るために学生の質問や意見、教員からの回答やアドバイスを記入できるほうが良いと考えるなら、修了や点数を記入する一覧表と、意思疎通のための記入欄の両方を備えた記入用紙が求められる。たとえば以下のような形式が考えられる。(図3、図4)

	小テスト 得点	質問／意見	教員記入欄
第1回			
月 日			

図3：小テスト記入欄を設けた「授業記録」用紙（案）

課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日	課題 番号	修了 日
1		2		3		4		5		6		7	
8		9		10		11		12		13		14	

	質問／意見	教員記入欄
月 日		

図4：課題修了日記入欄を設けた「授業記録」用紙（案）

用紙の形式は学期の途中で変えることはできないので、事前に何を記入させるべきか十分に検討しておく必要がある。何を記入させ記録しておくべきかは授業の目標と「授業記録」の使用目的によって決まってくるので、シラバスを決める時点から「授業記録」使用を意識しておくことが大切だと思われる。

なお特に e-learning 科目においては e ポートフォリオの利用も考えられる

が、仮に大学にそのシステムがあったとしても、学生が確実に定期的に目にする形になっているかどうかが問題である。学生がウェブサイトアクセスすること自体を忘れていたり億劫に感じたりする場合は、紙という媒体で自分の状況を目に見えるほうが効果的である。授業時間あるいはオフィスアワーには特別の事情が無い限り出席することを学生に求め、学生が自分の学習状況を半ば強制的に見せられるという状況が、学習意欲の維持に役立つはずだ。

6.2 授業のまとめとして

授業の最後には、言語的な事柄（キーセンテンスなど）、教員からの質問に対する答え、授業についての感想などを記入させた。これらは、①授業の内容を振り返らせ、重要な事柄を復習させる、②学生と教員の意志疎通を図る、という目的があった。

①の目的で感想や意見を書かせる場合は、何を書いたらよいかわからなくて書けない、あるいは授業内容とは関係のないことを書く、ということがないように、学生が授業内容を振り返らざるを得ない条件やヒントを与えると良いと思われる。こうすることによって、全員が限られた時間内に記入を終えることができ、また学生に授業の要点を気づかせることもできるので、学生間の学習レベルの差を埋めることができる。毎回同様の課題で書かせることで、学生の授業内容に対する意識を高めることができる。

筆者の授業では、記入のための時間が十分取れないなどの理由で記入内容が一定せず、一覧しても比較できないことが多かった。「授業記録」記入を含めた時間配分を慎重に考え実行することで、学生が自分の記入内容を見て、過去の授業内容を思い出したり自分の成長や変化を感じたりできれば、「授業記録」の効果が増すと思われる。

②の学生と教員の意志疎通を図るという点は、全学生に強制するものではないので、他の機能に追加する目的と考えるべきであろう。しかし学生が授業のやり方や授業内容についての質問や意見を表明する手段としては、直接教員に口頭で伝えること以外には、ほとんどない。授業アンケートは学期終了後または終了近くになってから行われるので、その学期の授業改善には役立たない。したがって学生がより積極的に質問や意見を言うように促すべきであるし、授業中に意見表明の場を提供できることが望ましい。「授業記録」用紙は個人別であるため匿名性が無く、そのため学生は発言しにくいと感じ

る恐れもあるが、他の学生を気にせず教員に直接発言でき、教員からの返答を確実に本人に届けることもできる。このような学生・教師間の道具があることは、授業改善に役立ち、学生の満足度を上げることに役立つものと思われる。

6.3 まとめとしての用紙の形式

キーセンテンスなどを書かせるには比較的狭い記入欄でも問題ないが、意見や感想は、ある程度の行数が欲しい。また小テストについても点数だけでなく解答そのものを記入させて教員が確認したい場合は、かなりの広さの記入欄が必要である。記入する内容に合わせて授業科目ごとに形式を変えて作成、印刷することもできるが、どちらかという余裕のある紙面を確保したものに統一したほうが見やすい。大規模クラスで記入内容を読むのに時間がかかる場合は、逆に記入欄を小さくすることで、教員の負担を減らすこともできるだろう。

記入欄を大きくすると A4 版 1 枚に収まらず、大型の用紙を二つ折りにしたり、複数枚を重ねたり綴じたりする面倒が生じ、記述内容を一覧することもできなくなるが、授業の都度、目的に合わせて複数の用紙を配付・回収するのに比べれば、一枚もしくは一組の用紙に複数の機能を持たせる方が合理的である。また二つ折りにした用紙自体をフォルダーとして利用することもできる。

6.4 今後の可能性

小テストなどの解答や指定されたテーマによる意見を書く場合は、学生は用紙への記入が授業と密接に関係があると感じ、記入の意欲も持てると思われるが、e-learning の受講や小テストの点数の記録、出席確認の手段として「授業記録」を見てしまうと、記入の意義が薄れてしまう。「授業記録」が持つ機能として、「学生が自分の記録を取ることで、自分の記録を見てやる気を出したり学習の計画を立てたりすること」「授業の最後には授業内容を振り返り、重要な点を記憶に残すこと」「疑問点は質問して明らかにしておくこと」「教材を新たな視点で見直すこと」などを学生が意識すれば、授業全体の活性化につながると思われる。今後はアンケートなどで「授業記録」の記入内容や用紙の形式について学生の意見を求め、その機能を十分発揮できる使い

方を探りたい。

現在のところ「授業記録」のような記入用紙と学生の成績や課題達成度に正の相関関係があるという報告は聞いていない。この種の記入用紙は、学生の自覚や意識、動機付けを高めるという効果は期待できるが、それが直接成績に結びつくものではないので、当然かもしれない。しかしこのような用紙記入行為が長期にわたって学生の学習意欲を維持し、自立を促していけば、自ずと成績向上も望めるのではないか。今後、より経時的な調査・研究が進むことも望まれる。

参考文献

- 大阪大学大学教育実践センター編．(2010).『魅力ある授業のために2- 双方
向型授業の取り組みを中心に』吹田：大阪大学出版会
- 織田 揮準．(1991).「大福帳による授業改善の試み：大福帳効果の分析」『三
重大学教育学部研究紀要．教育科学』42, pp.165-174.
- ケラー、ジョン・M. (2010).『学習意欲をデザインする—ARCS モデルによ
るインストラクショナルデザイン』鈴木克明 監訳、京都：北大路書房
- 向後千春．(2002).「心理学授業における「大福帳」カードの利用と効果」『日
本教育心理学会第44回発表論文集』p. 340.
- 向後千春．(2006).「大福帳は授業の何を変えたか」『日本教育工学会研究報
告集』06(5)、pp. 23-30.
- シャクリー、B. D.、N. バーバー、R. アンブローズ、S. ハンズフォード．(2001).
『ポートフォリオをデザインする』田中耕治 監訳、京都：ミネルヴァ書
房
- 鈴木克明．(2002).『教材設計マニュアル：独学を支援するために』京都：北
大路書房